

# English Garden 第89話

"There was excitement and enthusiasm over the creation of a better, more just and peaceful Japan."

Edwin O. Reischauer

## 「正しく平和でよりよい日本を創ろうという熱い意気込みがあった」 ライシャワー

元駐日アメリカ大使エドウィン・O・ライシャワーの4回目です。表題の言葉は、1948年に戦後初めて日本を訪れたときの印象です。

1945年8月、日米戦争はライシャワーの言葉によると「突然」終わりました。氏は原子爆弾の使用はまったく予想せず、11月まではかかると思っていたので、突然と感じたのです。彼は引き続き国務省に勤務することになりました。

暗号解読の仕事がなくなったので著作に励み、2ヵ月ほどで "Japan Past and Present" (『日本 過去と現在』) を書き、処女出版となったこの本を、戦争の犠牲となった兄ロバートに捧げました。これは後に何度か加筆修正されて "Japan The Story of a Nation" と改題され、数カ国語に翻訳されました。(日本語版『ライシャワーの日本史』)

それ以前、エドウィンはポツダム宣言の立案にも関わり、「日本」の無条件降伏を主張したローズベルト大統領に対して、「日本軍」の無条件降伏という表現に改め、適切な形で天皇制の存続を認める内容にするよう提言したということです。

そこで11月から「天皇と天皇制の将来に関する政策」の立案に力を注ぎ、12月に起草したものがアメリカの政策となりました。

1946年、国務省をやめて準教授としてハーバード大学に戻りました。ワシントンでの4年間で視野と経験が古代史から現代まで広がり、政府の機能や世界情勢も深く認識するようになりました。

戦中戦後の日本語学習からは各大学で優秀な人材が育ち、ハーバード大学にとって戦後の15年間は、東アジア研究が確立した時代となりました。日本への勤務につく前にハーバードで研修を受けた人もたくさんありました。その中には、エドワード・サイデンステッカーやドナルド・キーンなどの名前もあります。

1948年、エドウィンは戦後の日本を見たいと思って、人文科学顧問団の一員として訪日しました。まだ戦災の跡も生々しい東京の悲惨な状況に心を痛めますが、社会・政治制度が改正され、「日本人が勤勉と勇気をもって、よりよい新しい日本を建設しようとしている意欲を感じて大きな希望を抱いたのです。

このころのエドウィン個人の仕事としては円仁の『入唐求法巡礼行記』の翻訳 "Ennin's Diary: The Record of a Pilgrimage to China in Search of the Law" の完了があります。忠実な翻訳と同時に、"Ennin's Travels in T'ang China" (『円仁 - 唐代中国への旅』) というタイトルで、円仁の旅行を主題として同時代の歴史的事実などを加えた物語も書きました。この2冊は1955年、同時に出版されました。後者の方が広く読まれたのは言うまでもありません。これで20年にわたった円仁の研究が完了しました。

その1955年には、1月に悲しい出来事が起こっていました。数年前から心臓の発作に苦しんでいた奥さんのアドリエンが息を引き取ったのです。エドウィンは「体の中の配線がすべて焼き切れてしまったように」感じ、何をやる意欲もなくなりました。

それから間もなく、ハーバード燕京研究所の所長に指名されました。これは以前からもっとも希望していたポストでしたが、その前にしばらく休養をとり、気分一新をすることが必要で、まず東アジアを再訪し、帰国後に就任することになりました。3人の子供を連れて来日したものの、東京での生活は彼自身しっくりしなかった上に、通いはじめたアメリカン・スクールになじめない子もいて、一家は危機的な状況におちりました。前途が真っ暗になりかけた8月、将来夫人となる松方ハル氏が現れたのです。

その日、エドウィンは外人記者クラブで知り合いの新聞記者と昼食をとっていました。記者は、近くのテーブルに作家のジェームズ・ミッチナーがいるのを見てエドウィンを紹介することにし、二人で挨拶に行きました。すると、ミッチナーと食事をしていて日本人の女性ジャーナリストが立ち上り、エドウィンに「私、松方ハルです。アメリカン・スクール時代のあなたをよく覚えております」と挨拶しました。この場の空気は一気にくつろぎました。

ハルの伝記によりますと、このあとハルはエドウィンの娘ジョーンのパーティー用の服を作るのを手伝ったりしてライシャワー一家とひんぱんに会うようになり、急速に親しくなりました。「慎重居士」を自認していたハルでしたが、飾り気のないエドウィンの人柄に引かれて12月には婚約し、翌年1月、アドリエンの一周忌が済むのを待って結婚しました。エドウィンは45歳、ハルは40歳でした。

(次回に続く)

### 参考文献:

"My Life Between Japan and America" Edwin O. Reischauer, Harper & Row, Publishers, New York, 1986

『ライシャワー自伝』エドウィン・O・ライシャワー著、徳岡孝夫訳、文芸春秋、1987年

"Japan Past and Present" Edwin O. Reischauer, Charles E. Tuttle Co.: Publishers, 1964

『ライシャワーの日本史』エドウィン・O・ライシャワー著、国弘正雄訳、文芸春秋、1986年

『私の歩んだ道』ハル・ライシャワー著、主婦の友社、1966年(インタビュー記録)

『円仁 - 唐代中国への旅』("Ennin's Travels in T'ang China") E・O・ライシャワー著、田村完誓訳、原書房、1984年